

# 公立学校における英語リテラシーの課題

—子どもが書く意欲を持つ英語科指導法には何が必要か—

## The Current State of English Literacy in Elementary Education

-A Research on Teaching Strategies for Writing Skills-

オチャンテ・カルロス

OCHANTE, Carlos

### 要旨

小学校における外国語の教科化によって「読むこと」、「書くこと」が加わり、アルファベットの音声や文字の認識の習得が重要とされる。しかし、英語教育においてオーラシーからリテラシー教育への円滑な移行が行われていない。現状では読み書きに躓く児童が少なくなく、特に文字の音韻意識やフォニックスの指導に課題が見られる。本稿は現在、小学校における英語リテラシーの実態を考察し、外国語活動および外国語における指導のあり方を検討する。英語指導の初期段階においての文字の音韻意識とその指導を細かく、徹底的に行う必要がある。その上、フォニックスの指導においても文字の音素に確実に慣れ親しんだ状況で指導を行うことを考察している。英語リテラシーの指導には英国のジョリーフォニックスや英語と他の教科を連帯する横断的教育の取り組みも検討する。

キーワード：英語リテラシー、ESL、小学校外国語活動、外国語、教科横断的指導

### 1. はじめに

日本におけるグローバル化により、海外進出の必要性や国内社内での英語の普及により、ますます英語を使う状況がこれまでになく進んできている。これらの課題に対して、英語教育のあり方においては小中高教育レベルで、英語力の向上のために様々な見直しがなされ、改善にむけてこれまでに試行錯誤が繰り返されてきた。英語4技能の内、近年、よくとりあげられるのはリスニングやスピーキングの力、つまり英語オーラシーである。そのためスピーキングによる会話のやり取りなどを中心に様々な指導法が取り上げられ、塾などで英会話教室も普及してきた。

新学習指導要領が示され、2020年に小学校英語が教科化される。「外国語活動」と「外国語」に向けて小学校での英語教育の取り組みが本格的に増加している傾向にある。新学習指導要領において外国語と外国語活動の大きな違いは「読むこと」「書くこと」が目標に加わったことである（文部科学省、2017）。

しかし、英語リテラシー（読む・書く）に関しては特に公立学校での取り組みがまだ乏しく、また実践されている指導法はこれから発展する余地がまだまだある。現在これらの課題が高学年に繰り越され、中学校では初期から英語の読み書きに躓く子どもが出てくると考えられる。そのため、高校生になってもアルファベットをまともに書けない学生が多くいると考えられる。これまで5・6年生の「外国語活動」では、「低意欲・高不安」な気持ちを抱いている児童が両学年にお

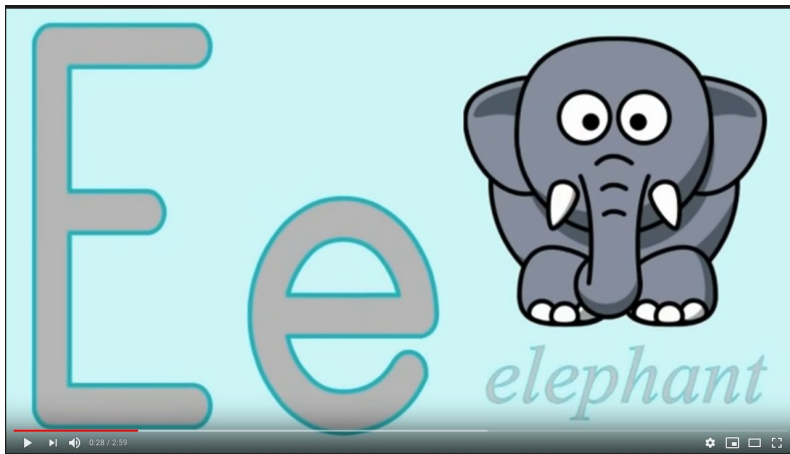
いて38%存在していることが報告されている(横石・北條, 2013)。小学校では今後、これらの課題に対しての新たな指導法が期待されている。

外国語教育においては第二言語習得の方法と課程を理解することは不可欠とされている。しかし、その知識の普及がモノリンガルを背景とする日本と多言語で多民族な背景のアメリカやフランスなどの国では大きな差ができています。

本研究として英語リテラシーに関しての実態を調べ、現在どのような取り組みが行われているのかを探りたい。また、今後どのような取り組みが必要かを考察することを目的にする。

## 2. 学習初期における外国語の指導の実態

3・4年生(多くの小学校では1年生から)から外国語活動の時間として英語を楽しく慣れ親しむ活動が行われている。教科書と補助教材(ワークシートなど)を中心にアルファベットの紹介や英語の語彙が導入される。また、ICTを使いながら、指定されたデジタル教科書のメディアやユーチューブを使って、英語のABCソングや様々なチャンツを使い、インタラクティブな授業が行われている。英語の音や文字になれさせ、正しく「読み書き」ができる目的としてフォニックスの指導も普及している。アルファベットの音に慣れさせるためには音素を認識する必要があり、アルファベットの音は文字の数、つまり26の種類と捉えるのではなく、実際にもっと多くの音が含まれることの理解が必要とされる。フォニックスには、ホール・ランゲッジ(Whole Language)の流れを汲む「全体から個」を重視したアナリティック・フォニックス(analytic phonics)と、「個から全体」へと音素の統合(synthesize)を意識させるアプローチを取るシンセティック・フォニックスなどがある。両者の違いは、単語指導へのアプローチの違いであると言える。アナリティック・フォニックスは文脈の中で出てくる単語についての意味を理解した上で、その単語の音(どう発音するか)を推測し、単語に含まれる音や文字のパターンに自ら気づくよう促されている(村上, 2015)。画像1にあるようにビデオと音声を使ってアルファベットの文字の様々な音を歌で学習させている。



画像1 ABC Phonics Song (ユーチューブから)

村上 (2015) はこれまで、英語習得の初期的段階においては特に音韻意識、フォニックスなどの指導が十分に行われていないと指摘し、結果的に高学年においては読み書きのパフォーマンスに影響すると指摘している。そのため英語の音韻習得は、教員の指導と学習者個人の適性に大きく委ねられている状態である。

### 3. リテラシー教育の課題

リテラシーの指導をする上で、フォニックスはアルファベットの文字と音声に慣れさせることから始まる。外国語活動の期間中に、音素認識や文字の音と形に慣れさせる活動としてチャンツなどの音声練習が行われている。また文字に気付かせるためには、身の回りの英語の言葉を認識させる活動があり、藤城 (2018) は「英語の文字に慣れ親しむ活動」として、コンビニエンスストア、飲食店など児童が良く知っていると思われるロゴを活用した「ロゴクイズ」を実践した。日常生活の中で目にする多くの英語とアルファベットの文字を認識させ、英語への興味・関心を引き出すことを可能にすることで「書くこと」の指導の土台となる取り組みやすい活動である。

また、高橋・柳 (2017) は教科化される高学年の英語教育では、子ども達に文字を意識させながら音声を十分聞かせた後に、文字を導入することや彼らの日常生活やこれまでの経験を活かした内容で「読むこと」、「書くこと」の指導をすることが大切である、と述べている。現在、文字の導入の取り組みが地域と学校によって異なり、文字指導の導入時期には児童の好奇心や文字をどれだけ認識しているかで異なるため、課題となっている。文字指導の時期が早すぎたり遅かったりすると好奇心・関心に影響し、「読むこと」「書くこと」への躓きに繋がってしまう可能性があると考えられる。そのためカリキュラム・マネジメントにより CAN-DO リストの流れを調整する必要がある。

多民族で多言語の背景があるヨーロッパでは第二言語習得の研究が進んでおり、リテラシー教育においては英語の初期指導の重要性に焦点をおいて読み書きの指導ための様々な研究が行われている。児童が英語を読解するまでに図2のようなリテラシーの発達概念を理解する必要がある。例えば、英国での読み書き教育に関する研究ではMorrison (2019) は、読解できるまでの段階を図1のように位置付けている。その中では音韻意識、フォニックス、文字意識が土台になっていることが分かる。

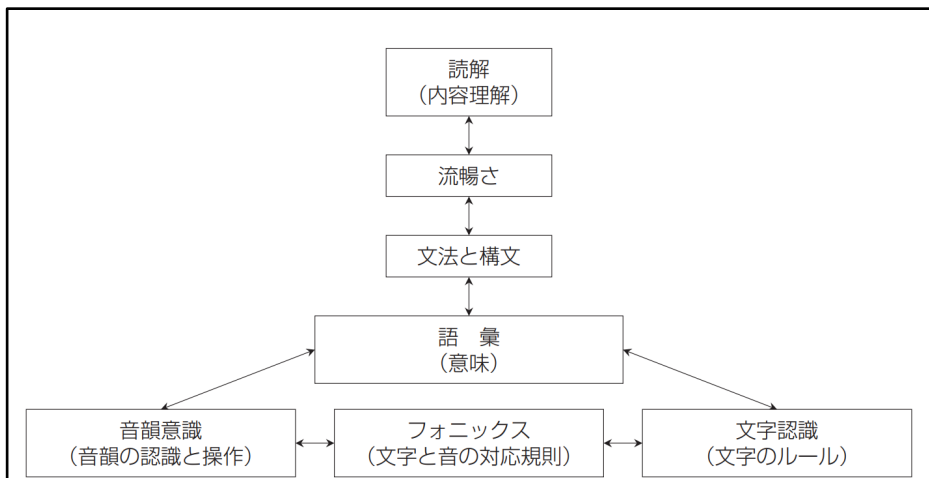


図1「リテラシーの発達の概念図」(村上, 2015・参考Morrison, 2009)

#### 4. 英国におけるフォニックス指導

英国では児童の認知発達に沿った読み書きの指導が行われており、ディスレクシアで文字と音の対応に困難を抱える生徒の実態にも備えて、読み書きに必要とされる「聞く力」を幼児期から育て、フォニックス指導へ接続する流れが重視されている(村上, 2015)。

近年日本でもフォニックス指導のために導入され始めているのはジョリーフォニックスである。

ジョリーフォニックス (Jolly Phonics) とは、Jolly Learning 社 (日本は東京書籍) より出版されている読み書きを習得するための教材である。ジョリーフォニックスは、文字と音を教えるシンセティックフォニックス法を用いている。こどもたちは、読み書きをするために文字の音をどのように使うかを学ぶ。

ジョリーフォニックスの特徴として、絵本感覚でアルファベットの音声の導入から始まり、フォニックスへと発展することが挙げられる。指導する課程では文字を絵だけでなく TPR 法を用い、体や手を使って非言語コミュニケーションを取り入れた指導を取り入れ、児童の好奇心を引き出す効果のある多感覚な指導法である。画像2にあるように文字の「S」の音韻を紹介し、蛇の形と蛇の音を連想させて”snake”の発音へとつなげる。また同じページには同じ文字で始まるその他の動物”snail”や登場人物の”Sam”などを含め物語感覚で子どもの関心を引き出すフォニックス指導が行われている。



画像2 ジョリーフォニックスの指導をする教師 (kayokoyamashita.com)

#### 5. 教科横断的指導における Partial CLIL

英語が必要とされる社会の現状により、英語が必須化されてきている。国内企業でも現在社内では英語をツールとして利用している。公立学校では、英語は英語の時間や受験の時間以外に必要とされることはほとんどない。そのため英語を必要と感じる児童・生徒の価値観は様々である。将来、留学する計画のある子どもや英会話教室に通っている子どもとそうでない子どもとの意識の違いは大きく異なっていることは否めない。また、英語教育に積極的に取り組んでいる地域や学校によって、学内の英語の表示、放送など、英語の環境が整っている学校とそうでない学校が多くあることも著者は視察してきた。近年、このような英語に特化した学校では、英語と他の教科を絡める指導、つまり教科横断的指導が実施されている。

例えば、英語の時間で教科書の内容以外に算数や理科の語彙を導入し、英語の数字を使って英語で足し算や引き算の算

数問題を子どもに与える活動がある。このような取り組みが内容言語統合型学習, CLIL (Content and Language Integrated Learning) で、英語を第二言語としている多くのヨーロッパの国で実践されている。北條 (2017) が CLIL を取り入れた実践授業をまとめたものが以下の表である。

表1 他教科の内容を取り入れた CLIL 型の実践授業 (北條,2017)

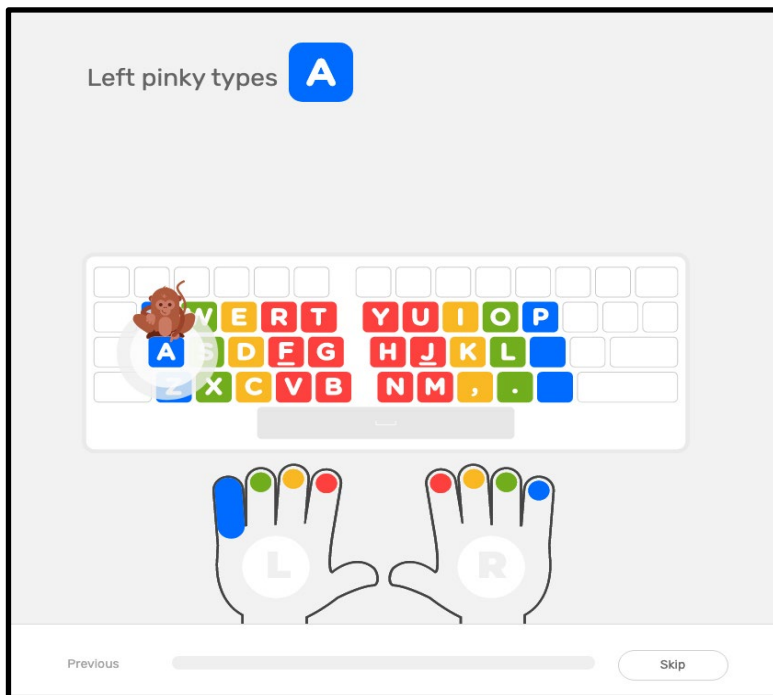
山岸 (2010)	新潟県 6年生 32名	国語 (漢字の偏やつくりなどの部首と英単語, 画像を組み合わせた り, 漢字を作ることで, 漢字の部首に当たる英語表現に親しむ)。食 育 (身近にある食べ物を用い, 2つの食材を組み合わせて別の味を 再現する活動を通して, How does it taste? It's sweet/ salty/ bitter/ sour/ hot.) と答える表現に親しむ)。算数 (錯視図を用いて, もの の長さ, 大きさ, 形を比べることにより, Which is longer, A or B? Which is bigger, A or B? など, 長さや大きさを表す英語表現に親し む) という内容を取り入れ, スマートボードを活用した外国語活動 プログラムを開発した。	ARCS 動機づけモデルに基づく 5つの全側面が高い評価を受けた ことからスマートボードを活用した CLIL 型の学習プログラム は, 6年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。 しかし, 「自信」の側面の評価が若干低かった。特に6年生にとつ て, 国語の内容のうち, 単純な組み合わせ問題は, やや物足りない 内容であった。
山野 (2011)	山口県 長野県 埼玉県 東京都 大阪府 5・6年生 208名	各小学校において社会科, 道徳, 家庭科, 国語, 算数, 理科と統合 した CLIL 授業を実践した。大阪府では “Hi, friends?” を用いて通 常の外国語活動を non-CLIL 授業として行い, CLIL 授業と比較し た。	CLIL の 4 原理を促進できる可能性があった。しかし, 課題とし て CLIL 型授業における英語の多様性と難しさ, 4 原理を取り入 れた指導案作成における教員の負担が大きいたことが明らかとなっ た。
茂木 (2013)	新潟県 5年生 46名 6年生 52名	CLIL 的外国語活動の実践として, 食育とタイアップした「私のオリ ジナル弁当」を紹介する活動を行った。What would you like? Looks delicious. Looks good. Looks healthy. など自然な英語表現を扱っ た。	CLIL 型の学習プログラムは, 4年生児童の英語への動機づけを向 上させる効果があった。特に「自信」に関する項目が有意に高か った。食育以外の他教科とのコラボレーションによる CLIL 的 外国語活動の開発により, 子どもの外国語活動に対する自信を高め る効果があるのかどうかをさらに検討する必要があることが課題 となった。
永島 (2014)	新潟県 6年生 113名	社会科 (世界の色, 国旗, 世界の料理) と内容面で連続性があり, そこに絵本の読み聞かせ, チャンツを組み合わせた外国語活動プロ グラム 3 回分を開発した。	CLIL 型学習プログラムは, 6年生児童の英語への動機づけを向上 させる効果があった。ARCS 動機づけモデルの 5つの側面のうち, 「自信」の評価が若干低かったが, 注意, 適切性, 自信, 満足感, 意欲という 5つの側面が高い評価を受けた。
二五 (2013)	広島県 6年生	ひろしま型の指導案の枠内で多重知能や教科横断的指導 (算数) の 視点を独自に盛り込み, 「英語の数」をテーマとする英語科の授業を 3 回続きで実践した。	算数の計算を取り入れ, 英語学習だけを意識することなく, イン プット量やコミュニケーションの機会を増やし, 自然に数の語彙 の定着を図ることができた。教科横断的には国語・音楽・体育・ 図画工作など多様な活動を取り入れることにより, たとえ算数が 苦手であったとしても, 45 分の英語の授業時間内にどの子どもに も少なくとも一つは活躍の場を提供することができた。
金安 (2015)	新潟県 4年生 64名	社会科 (日本と世界の地図記号を用いて, What's this mark? とい う表現に親しむ)。算数 (1 から 59 までの英語表現に慣れ親しみ What time is it? It's - (o'clock). と言える), 国語 (十二支の英語の生き物 表現を知り, 十二支時計を用いて方位と時刻の言い方に慣れ親しむ) という内容を取り入れた外国語活動プログラムを開発した。	CLIL 型の学習プログラムは, 4年生児童の英語への動機づけを向 上させる効果があった。ARCS 動機づけモデルに基づく 4つの側 面が高い評価を受けたが, 「自信」の側面の評価が若干低く, 4年 生の自信をどのように向上させるのが課題として残った。

## 6. 情報リテラシーにおける英語の読み書き

教材の電子版が既に教室で使用されるようになり, パソコンやタブレットの扱いに教員も児童も慣れ始めている。キーボードで文字入力する操作が今ではパソコン以外にタブレットやスマートフォンでも行われ, ローマ字入力についての基



本操作が普及している。アルファベットのキーボード入力は情報リテラシーの大事なスキルであり、今後キーボードの操作でエッセイの作成以外にデータの作成やプログラミング教育でも必要になってくると言われている。画像3のようにパソコンを使って、アルファベットの入力ができ、音声とともにゲーム感覚で文字に慣れ親しむ活動が可能である。鉛筆を持ち、ノートに書く作業は尊重しながら補助活動として行えば、情報リテラシーとの横断的教育の実践に繋がる。



画像3 子ども用のアルファベットの入力活動事例 (typingclub.com)

高学年でアルファベットがよりスムーズに書けるようになれば、今度は文章を書いたり、メールを書いたりする活動も期待できる。実際に英語の文章を使って SNS で海外の人と連絡をとったり、授業内・外で英語のブログで生徒同士が英語でメッセージを送り合ったりする活動も実践されている。

## 7. おわりに

小学校における英語教育においてオーラシーからリテラシー教育への移行には課題があり、今はまだスムーズに統合できる状況ではない。小学校教員の負担がますます増える中、教員の英語の指導力によって授業が適切に行われるかが問われている。本稿では、リテラシーの土台である音韻認識やフォニックスの指導は日本人教員とALTの力を合わせなければならない。そのため、理論だけでなく、実践においても研修を重ね、連携の整った体制で指導や研究授業も必要である。

今後、英語の必要性は子どもだけでなく学校全体で抱えなければならない課題であるため、学校全体で英語に対しての環境作り、カリキュラム・マネジメントで横断的な教育に取り組むことが必要であると考えられる。

## 引用・参考文献

- (1) 太田圭・長瀬慶来 (2018) 「Partial CLILと小学校外国語活動—小学校5年生の家庭科実践の分析から—」山梨大学、教育実践学研究 23 号

- (2) 長瀬慶来・長瀬恵美, 2013. 「山梨市小学校英語特区の概要 と評価基準について—グローバル評価基準 CEFR を中心 に—」. 『山梨大学教育人間科学部紀要』. (15).
- (3) 藤原真知子 (2018) 「小学校低学年からの英語リテラシー学習：英語が読める 3 年生を目指して」聖学院大学総合研究所 Newsletter. Vol.27. 2号
- (4) 藤城妙子 (2018) 「小学校英語教育における「書くこと」の指導の工夫」山梨大学  
([http://www.edu.yamanashi.ac.jp/modules/xelfinder/index.php/view/2290/0008%20%ES%97%A4%E5%9F%8E\\_p\\_df](http://www.edu.yamanashi.ac.jp/modules/xelfinder/index.php/view/2290/0008%20%ES%97%A4%E5%9F%8E_p_df))
- (5) 北條礼子 (2017) 「小学校英語教育における内容言語統合型学習 (CLIL) の可能性：ドイツにおける CLIL をはじめとする英語教育事情にも注目して」上越教育大学研究紀要 第36巻第1号
- (6) 村上加代子 (2015) 「英語の学習初期における読み書き指導の在り方の検討：基礎的な力としてのデ コーディングと音韻意識スキル獲得の必要性について」神戸山手短期大学紀要58号
- (7) 文部科学省, 2017. 「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」.
- (8) ABC phonics (<https://www.youtube.com/watch?v=BEL1ZKpi1Zs&t=32s>)
- (9) Typing Club (<https://www.typingclub.com/kids-typing>)